

日向市教育研究所

I 研究主題	13-1
II 主題設定の理由	13-1
III 研究目標	13-1
IV 研究仮説	13-1
V 研究組織	13-1
VI 研究の実際	
1 理科研究班	13-2
2 英会話研究班	13-6
○ 引用・参考文献	13-10
○ 研究同人	

I 研究主題

児童生徒が主体的に取り組み、確かな学力と実践力を身に付ける学習指導の在り方
～理科、英会話科における指導の工夫改善を通して～

II 主題設定の理由

日向市では、平成17年3月に「日向市小中一貫教育基本計画」並びに、学校教育推進のための基本方針である「ひゅうが学校教育プラン」を策定し、「学力向上」や「豊かな心の育成」などを推進しながら、小中一貫教育に取り組んできた。

この施策を受け、本研究所では、平成19・20年度には、義務教育9年間を見通した教育課程の工夫など、ソフト面の連携システム開発を中心とした研究に取り組んだ。平成21年度からは、その検証のための国語科、算数・数学科の授業研究を中心とした実践的な研究に取り組み、教材分析の仕方や発問の工夫、話し合い活動の充実など、学力向上に資する授業の在り方について研究を深めることができた。

また、国際貿易港を有し、電子部品や医療器具等の生産において、世界的なシェアを誇る企業が集積する本市において、理数教育の充実・外国語教育の充実が求められている。

そこで、平成24年度から理科と英会話科に絞り研究を行い、理科においては科学的な見方や考え方を身に付けさせること、英会話科においては英語に慣れコミュニケーションを図ろうとする児童生徒を育てることに取り組んでいる。

本年度も、これまでの研究を踏まえ、理科については引き続き、「科学的な見方や考え方の育成」、英会話科については、「実践的コミュニケーション能力の育成」を目指し、二つの教科で指導法の工夫改善に取り組んでいく計画である。

本研究所は、小学校と中学校の教員が一緒になって研究を進め、研究授業及び授業研究会の際は、研究員以外の教員にも参加を呼びかけ、小・中学校から多数参加している。この研究の進め方は、本市における小中一貫教育を推進する上でも大変意義深い。

III 研究目標

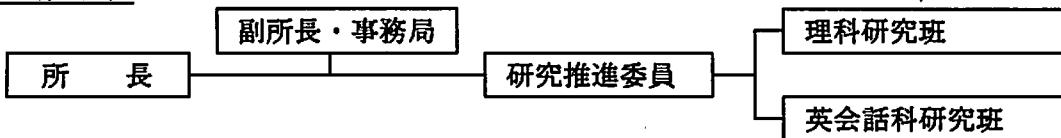
学習指導要領の趣旨を生かした、学力向上に資する授業の在り方について究明する。

- 実生活との結び付きをもとに学習の有用性や楽しさを感じさせながら、児童生徒の科学的な見方や考え方を育てる理科学習の在り方
- 英語に慣れ親しみながら、積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童生徒を育てる英会話科学習の在り方

IV 研究仮説

小・中学校の理科、英会話科において、児童生徒の実態を踏まえた授業、学習の有用性を感じる授業、学習指導要領の趣旨を生かした授業を展開すれば、児童生徒が学習に主体的に取り組み、確かな学力を身に付けることができるであろう。

V 研究組織



VI 研究の実際

1 理科研究班

現行の学習指導要領では、小学校理科の目標において、「実感を伴った理解」という文言が新たに付加された。『小学校学習指導要領解説理科編』によると、この「実感を伴った理解」は3つの側面から考えることができると示されており、本研究班ではその中の「実際の自然や生活との関係への認識を含む理解」という記述に着目することにした。

「実際の自然や生活との関係への認識を含む理解」とは、理科の学習で学んだ自然の事物現象の性質や働き、規則性などが実際の自然の中で成り立っていることに気付いたり、生活の中で役立てられていることを確かめたりすることによって図られる理解である。このことは中学校理科の学習指導要領改善の基本方針での「実社会や実生活と関連付け」という点とも、密接につながりがあると捉えられる。

そこで、本研究班では、小・中学生の理科学習に対する意識や実態を考慮しながら、理科学習指導過程のそれぞれの段階において、「実生活との結び付き」を図る指導法の工夫改善に取り組んでいくことにした。このことにより、児童生徒に理科学習の意義や有用性を実感させながら、学習への主体的な取組の態度を育てようとする本研究所の研究目標に迫っていきたいと考えた。

さらに、「科学的な見方や考え方」を育っていくには、言葉を的確に使って観察・実験の結果を整理したり、科学的な用語や概念を使用して説明したり考察したりするなどの学習活動の充実を図っていくことが大切である。そこで、昨年度より本研究班で取り組んできた「考察を深めるための授業づくり」に改めて視点をおき、その指導法の深化・充実を図りながら、生活とのかかわりの中で、児童・生徒が既にもつている自然についての素朴な見方や考え方を実証性、再現性、客觀性のある科学的なものに変容させていく取組の展開を目指していく。

(1) 研究主題及び副題

科学的な見方・考え方を育てる理科学習指導法の在り方

～ 実生活との結び付きや言語活動の充実を図った指導法の研究を通して ～

(2) 研究の仮説

理科の授業において、学習指導過程の各段階に「実生活との結び付き」を意識した指導を位置付けるとともに、観察・実験等の結果を整理・考察・表現する活動の充実を図っていけば、児童生徒に学習の意義や有用性を実感させながら、科学的な見方や考え方を育していくことができるであろう。

(3) 研究内容

ア 児童生徒の意識調査の分析

イ 「実生活との結び付き」を図る指導法の工夫

ウ 言語活動の充実を図る手立ての工夫

(4) 研究の実際

ア 児童生徒の意識調査の分析

本研究を推進するにあたって、児童生徒の理科学習に対する意識の実態や理解の状況を把握することを目的に実態調査を行った。対象児童生徒は、本研究班で研究授業を実施する小学校第3学年・中学校第1学年及び第2学年とし、その後の授業づくりに生かすことができるようにした。9月のおもな調査結果並びに分析は次のとおりである。

【9月調査結果……小学校3年～対象児童：2校72名 中学校1・2年～対象生徒：2校219名】

小3 「理科の学習は普段の生活の中で役に立ったことがありますか」

中1,2 「理科の学習は、生活に役立つと思いますか」

小3 「ある」 27%	「ない」 70%	無回答 3%
中1,2 「役立つ」 37% 「少しは役立つ」 46% 「あまり役立たない」 14% 「役立たない」 3%		

小3 「これまでに知っていたことが理科の学習の中で役立ったことがありますか」

中1,2 「普段の生活で身近にあるもの・ことが理科の授業とつながっていると感じることがありますか」

小3 「ある」 33%	「ない」 64%	無回答 3%
中1,2 「感じる」 28% 「時々感じる」 51% 「あまり感じない」 18% 「感じない」 3%		

「理科学習と実生活との結び付き」に関する質問事項である。小学校第3学年においては、理科学習がスタートして間もないこともあり、調査結果としては妥当なものではないかと捉えられる。しかし中学生においては、20%前後の生徒が有用性について否定的な感じ方をしている傾向が見られ、生活とのつながりを一層意識させる手立てが必要である。

小3：①「日なたと日かけあたたかいのはどちらですか」②「そのように考えた理由が書けますか」

①：「日なた」 89%	「日かけ」 4%	「どちらも同じ」 6%	無回答 1%
②：「書けている」 35%	「ある程度書けている」 5%	「不十分」 53%	無回答 7%

中1,2：①「実験の結果を書くことができますか」②「実験の考察を書くことができますか」

①：「書ける」 37%	「まあまあ書ける」 46%	「あまり書けない」 14%	「書けない」 3%
②：「書ける」 17%	「まあまあ書ける」 48%	「あまり書けない」 32%	「書けない」 3%

「言語活動の充実」に関する質問事項である。上記の結果から、小学校第3学年、中学校第1・2学年どちらも、言葉を的確に使って考察や考えた根拠を表現することに苦手意識や難しさを感じている児童生徒が多くいる状況や実態がうかがえる。

イ 「実生活との結び付き」を図った指導法の工夫

(ア) 学習指導過程の各段階における位置付け

前述の実態調査の結果を基に、理科の学習指導過程の各段階において、下の資料1の考え方で「実生活との結び付き」を意図的に図っていくことにした。このことで、学習した自然事象の性質や働き、規則性が身近なところで成り立っていることに気付かせたり、生活の中で役立てられていることを確かめさせたりすることができるのでないかと考えた。

【資料1 「実生活との結び付き」を図った指導の工夫】

- ① 生活の中の事物・現象を学習問題として提示する。
- ② これまでの生活経験の場面等を提示しながら、学習問題について調べる方法や結果についての予想をさせる。
- ③ これまでの生活経験や生活の中での現象をもとに、観察・実験の際の留意点等について気付かせる。
- ④ 観察・実験の結果について、予想と異なる場合に、生活の中での現象や学習経験と照らし合わせながら、予想を見直す。
- ⑤ 観察・実験の結果や考察をもとに、学習したことを生活の中の事物・現象にあてはめて考えさせながら、学習のまとめをする。

また、「実生活との結び付き」を図ることで、学習内容に対する児童生徒の興味・関心を一層高め、理科学習の楽しさや有用性を感じさせることもできるととらえている。

(イ) 小学校第3学年「かけのでき方と太陽の光」(2／8時)における実践

本単元においては、児童の学習への関心・意欲を高める手立てとして、導入となる第1時に運動場で実際に「影遊び」をやってみるという学習場面を設定した。それを受け、本時では、次の各段階で「実生活との結び付き」を図った学習活動を展開した。

【本時の目標】 観察結果から、影のできる向きと反対側に太陽があることを説明することができる。	
主な学習内容並びに活動	指導法の工夫と児童の反応
<p>1 本時の学習について話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 前時学習のふりかえり ○ 学習問題 かけができるとき、太陽は、かけのどちらがわに見えるのだろうか。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「影ふみ遊びの必勝法が学習を通してわかるよ」と投げかけながら、本時の学習問題への方向付けを図り、解決への意欲を高めた。 <p>「実生活との結び付き」を図った指導の工夫</p> <p>資料1① 生活の中の事物現象を学習問題として提示する。</p>
<p>2 学習問題に対する結果の予想とその予想した理由を書く。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 児童にこれまでの生活経験や前時の「影遊び」の体験を想起させることで、「かけふみおにをしたときに②がわにかけがあつたから③のはんたいがわ④の方にたいようがあると思う」というような根拠を基にした予想が見られた。 <p>「実生活との結び付き」を図った指導の工夫</p> <p>資料1② これまでの生活経験の場面等を提示しながら、学習問題について調べる方法や結果についての予想をさせる。</p>
<p>2 学習の進め方について話し合う。</p> <p>3 観察方法を確認し、観察をする。</p> <p>4 実験結果を話し合い、考察する。</p> <p>5 本時の学習について振り返る。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 観察結果や考察を基に、再度、導入段階で投げかけた「影ふみ遊びの必勝法」について考えさせ、「かけの反対側に太陽があること」を確かめるとともに、次時の学習へつなげることができた。 <p>「実生活との結び付き」を図った指導の工夫</p> <p>資料1⑤ 観察・実験の結果や考察をもとに、学習したことと生活の中の事物・現象にあてはめて考えさせながら、学習のまとめをする。</p>

(ウ) 中学校第1学年「物質の状態とその変化」(5／7時)における実践

本単元では前時までの身の回りの物質の状態変化や融点・沸点についての学習を受け、

本時においてはストーリー性をもたせた学習問題の提示により、融点を測定することで物質を特定するという学習場面を設定した。ここでも、以下のように「実生活との結び付き」を図った学習活動を位置付けた。

【本時の目標】 融点を測定することで、その物質が何であるか類推することができる。	
主な学習内容並びに活動	指導法の工夫と児童の反応
<p>1 前時の学習を振り返り、本時の学習について話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 学習問題 融点を測定することで、物質を特定することはできるのだろうか。 <p>2 予想を行う。</p> <p>3 実験をし、結果を記録する。</p> <p>4 実験結果を記入する。</p> <p>5 本時の学習について振り返る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時では区別の付かない2つの物質としてメントールとセタノールを取り上げた。この2つの特定ができた時点で、これらが生活中でどのように使われているかを知らせ、2つの物質についての理解を深めることができた。またメントールはハッカに含まれている成分であることを伝え、においを確かめさせることにより、融点による特定が正しかったことを確認させることができた。 <p>「実生活との結び付き」を図った指導の工夫</p> <p>資料1⑤ 観察・実験の結果や考察をもとに、学習したことと生活中の事物・現象にあてはめて考えさせながら、学習のまとめをする。</p>

ウ 言語活動の充実を図る手立ての工夫

(ア) 理科の指導過程における言語活動の位置付け

言語活動の充実に向けて、本研究では特に「外へ向かう表現・思考活動」としての「話すこと・書くこと」の重要性に着目した。他者を意識した表現活動として、観察・実験の結果を的確に記録させたり、考察を深めさせたりする手立てを工夫することで、「実感を伴った理解」が図られ、「科学的な見方や考え方」が深められるのではないかと考えた。

そこで、「話すこと・書くこと」の言語活動を、資料2のように学習指導過程の各段階に位置付け、下表のように整理してみることにした。

【資料2 「話すこと・書くこと」の言語活動の位置付け】

各段階(児童・生徒)	「話すこと・書くこと」
① 問題を見つける。 ↓	既習事項を振り返らせ、そこからの新たな疑問を学習問題へと醸成していくために話し合わせる。
② 予想を立てる。 ↓	学習問題の解決への見通しをもたせ、予想を立てるために文章化させたり、話し合わせたりする。
③ 観察・実験をする。 ↓	学習問題の解決に向けての観察・実験の方法を考えるために文章化させたり、話し合わせたりする。
④ 結果を整理する。 ↓	観察・実験の結果を整理するために気付きを文章化させたり、図や表、グラフにしたりする。
⑤ 考察する。 ↓	学習問題や予想に照らし合わせながら結果を審査するために文章化させたり、話し合わせたりする。
⑥ 学習したことをまとめる。	これまでの学習を振り返らせ、理解や考えを深めるために文章化させたり、話し合わせたりする。

(イ) 小学校第3学年「かけのでき方と太陽の光」(2/8時)における実践

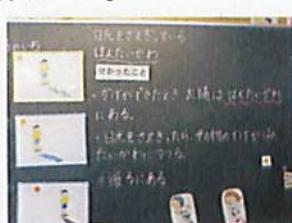
本時においては、影と太陽の位置関係を観察させた後(授業当日は雨天のため人形と光源を使って観察)右のようなボードを活用して、影と太陽の位置を貼り付けさせ、グループごとの話合いを取り入れながら観察結果を表すことができるようとした。

また、前時の振り返りを行った導入の段階で「日光」や「さえぎる」という言葉を押さえていたので、児童はボードに貼り付ける活動を通して、それらの言葉を的確に使いながら、観察結果を短い文章にまとめていた。

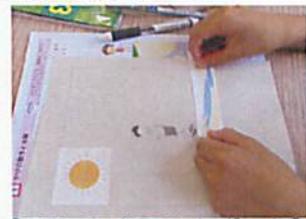
さらに、すべてのグループのボードを黒板に掲示し、照らし合わせながら、結果を基にした考察について全体で話し合せた。



【写真4 グループでの話し合い】



【写真5 各グループの考察】



【写真3 活用したボード】

その際、グループごとの児童の発表を基に意見交換を行いながら、教師と共にキーワードとなる言葉を選んでいくようにした。そして最終的に「分かったこと」としての考察を「太陽は、うつったかけのはんたいがわにある」という形でまとめることができた。

(ウ) 中学校第1学年「物質の状態とその変化」(5/7時)における実践

本時においては、授業の導入段階で既習事項の振り返りとして、機器を活用しながら「融点、沸点」等の学習した用語や概念についての確認を行った。

その後、融点の測定により2つの物質を特定する実験の結果を各グループが出し合い、全体の傾向を確認した後、考察を書かせる作業に取り組ませた。

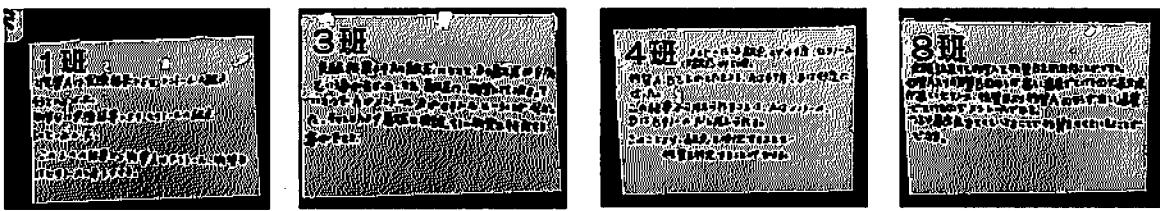
その際、

「～〔理由・根拠〕という実験結果より、物質Aは～
物質Bは～と考えられる。」



【写真6 考察をまとめる生徒】

という考察の書き方のフォーマットをワークシートに示した。



【写真7 各グループの考察】

のことにより、生徒はこれまでの学習経験も生かしながら、上記のように自分たちなりの工夫を加えて考察をまとめることができた。

(5) 成果と課題 (○ : 成果 ● : 課題)

- 授業の中に「実生活との結び付き」を図った学習場面を意図的に設定したことにより、児童生徒の学習内容に対する関心が高まり、授業への意欲的な取組と学んだことを生活とのかかわりの中で改めて見直そうとする姿が見られるようになった。
- 観察・実験の結果や考察を記録する場面において、手順を示しながら継続的に指導を行ったり、手立てを工夫したりしたことにより、児童生徒の表現することへの意欲や技能が高まり、科学的な見方や考え方へ少しずつ深まりが見られるようになった。
- 児童生徒の意識調査結果によると、本研究取組前後における「理科学習の有用性」に関する調査項目では、大きな変容は見られなかった。今後も、「実生活との結び付き」を意図的に図りながら、児童生徒の理科学習における有用感を一層高め、「実感を伴った理解」につなげていく必要がある。
- 科学的な見方、考え方を育成するためには、小学校から中学校まで、共通した指導過程や段階をおさえながら、継続的に問題解決的な学習を進めていく必要がある。

2 英会話科研究班

平成18年3月中央教育審議会外国語専門部会は「審議のまとめ」の中で、グローバル化の進展へ対応し小学校段階における外国語教育を充実させる必要があると報告し、平成23年度より全国一斉に外国語活動がスタートした。また、外国語活動の3・4年生への広がりや5・6年生の教科化が進められている。日向市においては、平成20年度より市内の全小・中学校において「英会話科」がスタートしている。これは、将来の国際社会において、児童生徒が文化や価値観の違う外国の人々と豊かな人間関係を築くことができる実践的コミュニケーションの基礎を培うことをねらってのことである。

本市の児童生徒は、6年目となった英会話科の学習において、ALTやJTEとともに楽しくコミュニケーション活動に取り組んでいる姿が見られる。しかし、日常の学習活動の様子を観察してみると、自分から進んでいきさつをしたり、自分の思いや考えを豊かに表現したりすることのできる児童生徒は多いとは言えない。指示されたことやしなければならないと感じている事柄には真面目に取り組めるものの、自分の考えで何かを表現したり、相手に分かりやすく伝えたりしようとする力が十分に身に付いておらず、実践的コミュニケーション能力を育てることができるような学習指導方法の工夫改善が必要であると考える。

そこで、本年度は昨年度に引き続き、このような現状や児童生徒の課題を踏まえ、英会話の楽しさを味わいながら、積極的に互いの思いを伝え合い、主体的に学習に取り組むことができるよう、研究主題・副題を以下のように設定した。

※ ALT…assistant language teacher

※ JTE…Japanese teacher of English

(1) 研究主題及び副題

英語に慣れ親しみながら、積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童生徒の育成
～日向市における英会話科の学習を通して～

(2) 研究の仮説

英会話科の学習において、互いの思いを伝え合うための学習活動を工夫すれば、積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童生徒を育成することができるであろう。

(3) 研究内容

平成24年度	平成25年度
○ アンケート結果による実態把握、分析	○ 互いの思いを伝え合うための学習活動
○ 互いの思いを伝え合うための学習活動の工夫	の工夫

(4) 研究の実際

英会話科研究班では、昨年度、アンケート結果による実態把握、分析を行った結果、英会話科の授業以外で英語を使ったことのない生徒が約35%いることが分かった。その結果から互いの思いを伝え合うための学習活動が必要であると考え、3つの視点（①児童生徒の実態に応じた指導計画の工夫、②「目標表現に親しむ活動」の工夫、③「コミュニケーション活動」の工夫）を設け、積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童生徒を目指して、小学校・中学校での検証授業を行った。昨年度の研究の課題として、意図的に場面を設定するにあたり、生活場面に即した活動をさらに増やしていく必要があることが明らかになった。

【日向市英会話科授業の基本的な流れ】

- 1 Greetings あいさつ
- 2 Warm up ウォーミングアップ
- 3 Introduction of Target Expression 目標表現の導入
- 4 Games & Activities 目標表現に親しむ活動
- 5 Communication Activities コミュニケーション活動
- 6 Farewell あいさつ

そこで、本年度は、互いの思いを伝え合うための学習活動の工夫に絞り、研究を進めることとした。特に、生活場面に即した「コミュニケーション活動」の工夫に取り組んだ。

「コミュニケーション活動」とは…
楽しく学習し、ゲームやアクティビティを通して身に付いた表現を使って自己表現させたり、実際の生活場面に即して意思伝達をしたりする活動。

ア 生活場面に即した「コミュニケーション活動」

生活場面とは、児童生徒の身近な暮らしにかかわる場面である。そこでは、英語でのコミュニケーションを自然な活動として体験させることができる。「日向市英会話科ラーニングスタンダード」（資料1）には、特有の表現が用いられる場面（あいさつ、自己紹介など）と児童生徒の身近な暮らしにかかわる場面（家庭での生活、地域での生活、学校での学習など）が示されている。このような場面を「コミュニケーション活動」に設定し、学習した表現を使って児童生徒同士、教師と児童生徒が積極的にコミュニケーションを図ることができるように手立てを工夫する必要がある。

資料1【日向市英会話科ラーニングスタンダード 内容（2）言語活動の取扱いから抜粋】

[言語の使用場面の例]

- a 特有の表現がよく使われる場面
・あいさつ・自己紹介・電話での応答・買い物・道案内・旅行・食事など
- b 身近な暮らしにかかわる場面
・家庭での生活・学校での学習や活動・地域の行事など

[言語の働きの例]

- a 考えを深めたり情報を伝えたりするもの
・意見を言う・説明する・報告する・発表する・描写するなど
- b 相手の行動を促したり自分の意志を示したりするもの
・質問する・依頼する・招待する・申し出る・確認する・約束するなど
- c 気持ちを伝えるもの
・礼を言う・ほめる・謝るなど

（ア）日向市英会話科テキスト「WE LOVE HYUGA」に位置付けられている生活場面

日向市英会話科テキスト「WE LOVE HYUGA」(以下、テキスト)には、【資料2】のように生活場面が位置付けられている。生活場面について整理すると、1年生から9年生(中学3年生)まではあいさつ・自己紹介が位置付けられており、場面に応じた英語での会話ができるようになってきた。

しかし、生活場面としてテキストに位置付けられているものはまだ限られており、多様な生活場面の設定が今後も必要である。さらに、生活場面における各学年間の系統を整理する必要性が見えてきた。

【資料2】日向市英会話科テキスト「WE LOVE HYUGA」に位置付けられている生活場面					
年 学 年 級 別 サ イ ト	あいさつ 自己紹介	買い物	電話	道案内	旅行(海外)
V 0 L 1	○基本的なあいさつ ・こんにちは ・お元気ですか				
	○基本的なあいさつ ・こんにちは ・何才ですか				
	○あいさつ ・お元気ですか	○店員さんに声をかけよう ・お店屋さんあてっこゲーム		○太郎さんを行こう ・動物グズ	
V 0 L 3	○お互いに自己紹介しよう ・自己紹介 ・インタビュー	○店員さんと会話をしよう ・店員さんとの会話 ・コードネートゲーム	○太郎さんをお願いします ・電話での会話 (話したい相手が電話に応対している場合)		
	○インタビューをして紹介しよう ・インタビュー	○値段の交渉をしよう ・値段交渉の会話			
	○インタビューをして紹介しよう ・インタビュー		○太郎さんをお願いします ・電話での会話 (話したい相手が留守で伝言を残す場合)	○海外に出かけよう ・乗務員との会話 ・入国審査での会話 ○楽しい体験 ・おトナショー	

(イ) 生活場面を設定した学習展開例

ここでは、「買い物をする」という生活場面について1~6年まで学年の発達段階に応じた「コミュニケーション活動」を設定した(資料3)。テキストには1・2年生の「買い物をする」学習は位置付けられていないが、1・2年生に位置付けることで系統性をもった学習が展開できるようにした。

また、多様な生活場面の一つとして、7年生の「料理をする」学習を設定した(資料3)。この学習では、料理することを通して、簡単な英語での会話を楽しむことをねらいしている。

【資料3】生活場面を設定した学習展開例】

年	生活場面	「コミュニケーション活動」の流れ	評価	準備
1年	○買い物をする。 (果物) ※検証授業1	1 店を4箇所作りフルーツカードを並べる。 2 客はかごを持って買い物に行く。 3 フルーツをかごいっぱい買ったら店員と客を交代する。	○フルーツに関する英語を使って友達とコミュニケーションをしている。	○フルーツカード ○買い物かご ○店
2年	○買い物をする。 (野菜)	1 店を2、3箇所作り野菜カードを並べる。 2 客はかごを持って買い物に行く。 3 野菜をかごいっぱい買ったら店員と客を交代する。	○買い物や野菜に関する英語を使って友達とコミュニケーションをしている。	○野菜カード ○かご ○店
3年	○買い物をする。 (文房具、食べ物)	1 3人1組になり、それぞれレストラン、文房具屋、八百屋オーナーになる。 2 カードの中から、4つの物をに入れ、四角の枠に置く。 3 順番に相手が入れている物を見てくる。	○文房具や食べ物、買い物に関する英語を使って友達とコミュニケーションをしている。	○文房具 ○食物カード ○四角の枠
7年	○料理をする。 ※検証授業2	1 目標表現を確認する。 2 調理の手順を聞く。 3 英語を使いながら、実際に調理を行う。	○料理することを通して、簡単な英語での会話を楽しんでいる。	○食材 ○調理器具

イ 「コミュニケーション活動」の工夫

(ア) 「買い物をする」活動（検証授業1）

対象学年 第1学年

本時の目標 好きな果物を尋ねる表現「What fruit do you like?」やそれに答える「I like~.」に親しみ、積極的にゲームやコミュニケーションを楽しんでいる。

検証授業1では、「コミュニケーション活動」においてショッピングゲームを行った。学習してきた果物の名前を使って友達とコミュニケーションを楽しめるように、4つの果物店を設定した。ゲームの説明は、ALTが全て英語で行ったあと、児童がルールをしっかりと理解できるようにALTとHRTのデモンストレーションを行った。カードや買い物バッグなど具体物を使ったゲームであったため、児童はとても意欲的で、「What fruit do you like?」「I like~.」などの表現に親しみながら、コミュニケーションを楽しむことができた

（写真1）。また「Thank you!」「Good bye!」等の自然なやり取りも見られた。集めた果物を見て、自分の成果を視覚的に確認することができるので、達成感も味わわせることができた。

低学年にとって、のれんや看板がある店を作るなど雰囲気づくりを行うことは児童の意欲を高める方法として効果的であった。写真カードなどを使うことも、絵と言葉をつないで理解を助ける方法として有効であった。

しかし、発達段階から、HRTやALTの目が届かない場での児童同士の活動になると、コミュニケーションが成立しないこともあるため、活動の範囲を広げ過ぎないなど、教師がすぐにサポートできる場の設定が必要である。また、ALTとHRTの効果的な役割分担も課題の一つである。

【検証授業1 第1学年 「コミュニケーション活動」の流れ】

段階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点及び手立て		準備資料
		HRT	ALT	
Communication Activities 「コミュニケーション活動」	① 店で好きな果物を買う。 ★ ショッピングゲーム 1 4つの果物店を設置する。(ALT・児童3人) 2 児童の3人は店員、残りの児童(17名)は客になる。 3 "What fruit do you like?" "I like~." のやり取りで、好きな果物をもらい、かごに入れていく。			<ul style="list-style-type: none"> ・はちまき ・果物パネル ・買い物かご

(イ) 「料理をする」活動（検証授業2）

対象学年 第7学年

本時の目標 料理をすることを通して、簡単な英語での会話を楽しんでいる。

検証授業2は、これまでに英会話科で学んだことを応用・発展させる活動の時間として位置付けた。事前に行った実態調査から生徒の大半は英会話科の学習が好きであることが分かった。しかし、学んだことを使って、外国の方とコミュニケーションをとることができると答えた生徒は半数であり、実際に英語を使う場面の少なさが自信につながらない原因の一つではないかと考えた。

そこで、意図的に実際の生活に即した料理をする場面を設定し、「英語を聞いてわかった」「英語で話して通じた」という喜びを味わうことで、英会話科の勉強が役に立っていること



写真1 ショッピングゲーム

を生徒の自信につなげるために以下のような「コミュニケーション活動」を展開した。

活動を進めるにあたって、ALTが料理の手順などを実物を示しながら全て英語で説明したが、生徒はしっかりと理解できていた。しかし、生徒が互いに相談したり、ALTやJTEに質問したりする機会を意図的につくる必要があった。

英語を使った会話は少なかったが、ジェスチャーを交えながら作業の内容を伝えたり、ALTを「Excuse me?」と呼び止めて質問したりする生徒の姿も見られた。

英会話科の学習に取り組んできた7年生を対象に授業を行ったが、英語に関する語彙力が豊かになる9年生を対象にした方が充実した活動を展開できると考える。

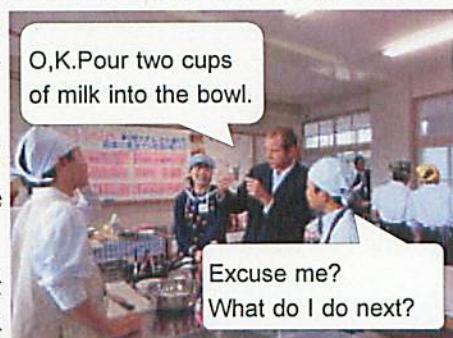


写真2 生徒の質問に答えるALT

【検証授業2 第7学年「コミュニケーション活動」の流れ】

段階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点及び手立て		資料準備
		JTE	ALT	
Communication Activities 「コミュニケーション活動」	① 調理の手順を説明 ② 実際に調理をする "Excuse me?" "I have a question." "What do I do (next) ?" "Pass me~, please." "How many OOO do we need?" "Sure." 料理をすることを通して、簡単な英語での会話を楽しんでいる。(観察)	○ 自分の役割を確認させ、料理をする。(T1) ○ わからないことや困ったことがあったら、掲示された英語を使ってコミュニケーションをとるようにさせる。(T1) ○ 実際に調理を行う生徒を支援していく。(T2)	○ 英語で調理の手順を説明する。 ○ ジェスチャーを使って教える。 ○ 実際に調理を行う生徒を支援していく。	• 食材 • 調理器具

(5) 成果と課題

- ごっこ遊びをしたり、実際に料理をするという生活場面に即した場を設定することで、英語を話したいという児童生徒の姿が見られた。
- ALT・JTEとの英会話科の学習によって、英会話で外国人の人と話すことへの抵抗を軽減し、もっと話したい、話せるようになりたいと思う児童生徒が多くなってきた。
- 本市の英会話科は、3・4年生の外国語活動の必修化、5・6年生の教科化という国の方針に十分に対応できる。
- 児童生徒が積極的にコミュニケーションを図ることができるようALTとHRTの効果的な役割分担について十分な打合せが必要である。
- 「買い物をする」活動や「電話をする」活動など、生活場面に即した「コミュニケーション活動」を増やし、系統的に指導する必要がある。
- 引用文献・参考文献
 - 日向市教育委員会 日向市英会話科テキスト「WE LOVE HYUGA」指導の手引き
 - 日向市財光寺小学校 平成21・22年度研究紀要
 - 文部科学省 小・中学校学習指導要領
 - 文部科学省 小学校学習指導要領解説理科編・外国語活動編 平成20年8月
- 研究同人

所長	北村 秀秋(教育長)	研究員	児玉 智保(財光寺小学校教諭)
副所長	松葉 貴文(学校教育課長)	研究員	土山 秀子(財光寺南小学校教諭)
統括研究員	吉田 英明(平岩小中学校教頭)	研究員	黒木 雄治(日知屋小学校教諭)
主任研究員	山元 雅彦(日知屋東小学校主幹教諭)	研究員	野見山あゆみ(大王谷学園教諭)
主任研究員	栗栖 健治(大王谷学園主幹教諭)	研究員	重黒木 寿恵(富島中学校教諭)
副主任研究員	甲斐 政憲(富高小学校教諭)	事務局	三樹 和幸(学校教育課長補佐)
副主任研究員	今村 富貴(東郷学園教諭)	事務局	猪野 貴一(学校教育課教育指導係長)
研究員	志野崎 友嘉(大王谷学園教諭)	事務局	湯地健一郎(学校教育課指導主事)
研究員	戸高 和哉(日向中学校教諭)	事務局	佐藤 真弓(英会話科アドバイザー)
研究員	高群 泰隆(財光寺中学校教諭)		